

2020年8月31日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086  
神戸市中央区磯上通 5-1-28  
www.lilly.co.jp

EL20-36

## 絵画・写真・絵手紙コンテスト 「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」 第10回の受賞者を発表・表彰

～ 最優秀賞は長谷 久枝さん(東京都)、久保田 将さん(愛知県)、亀石 滝子さん(大分県)～

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役社長:シモーネ・トムセン、以下、日本イーライリリー)は2020年8月28日、オンラインにて、第10回「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」絵画・写真・絵手紙コンテストの授賞式を開催し、絵画部門・写真部門・絵手紙部門あわせて83件の応募の中から、6名の受賞者を発表し、表彰しました。



【オンライン会見の様子】

### 第10回「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス がんと生きる、わたしの物語。」受賞者

#### 【最優秀賞】

絵画部門:	長谷 久枝(ながたに ひさえ)さん	(東京都葛飾区/70歳)『雨の初診日』
写真部門:	久保田 将(くぼた まさる)さん	(愛知県名古屋市/40歳)『軌跡の1枚、奇跡の1枚』
絵手紙部門:	亀石 滝子(かめいし たきこ)さん	(大分県国東市/78歳)『生かされている命に感謝』

#### 【優秀賞】

絵画部門:	松尾 倫子(まつお みちこ)さん	(福岡県福岡市/59歳)『水の中の女神』
写真部門:	渡邊 励人(わたなべ れいと)さん	(大阪府茨木市/25歳)『私の闘病』
絵手紙部門:	三好 亜希子(みよし あきこ)さん	(埼玉県八潮市/44歳)『今年是一緒に見ようね、桜』

受賞作品の画像・エッセイ(抜粋)をp3-4に掲載しております。画像データもご用意しております。

日本イーライリリーの執行役員でオンコロジー事業本部長の勝間 英仁は、次のように述べています。  
「リリー・オンコロジー・オン・キャンバスは、がんの経験を通して変化した生き方などを絵、写真、絵手紙とエッセイで表現し、多くの人とその想いを分かち合っていたく『場』として実施しております。作品の制作過程が、がんの患者さんや支援者にとって気持ちを整理し自分自身と向き合うきっかけとなることを願っております。応募者の方をはじめこれまで多くの方々に応援いただき、今回本コンテストは 10 回目を迎えることができました。日本イーライリリーは今後も革新的な抗がん剤の開発に取り組むとともに、患者さんや支援者の皆さんの心に寄り添い、がんになっても自分らしく生きられる社会の実現のサポートをして提供してまいります。」

第 10 回の受賞作品は、リリー・オンコロジー・オン・キャンバスのウェブサイト(<https://www.locj.jp/>) 及び Facebook(<https://www.facebook.com/locjChannel>) に掲載されます。

### <第 10 回「リリー・オンコロジー・オン・キャンバス がんと生きる、わたしの物語。」 募集・審査について>

募集期間： 2019 年 7 月 16 日～2020 年 1 月 31 日

応募件数： 絵画部門 31 件 写真部門 29 件 絵手紙部門 23 件

募集テーマ： 「がんと生きる、わたしの物語。」

審査： 【最優秀賞、優秀賞、入選】

絵画・写真・絵手紙作品ならびに制作背景を綴ったエッセイについて、作品の技術的・芸術的な評価よりも募集テーマを的確にとらえた作品であるかを重視し、以下 5 名の審査員により 2020 年 7 月 3 日に一部オンラインで審査が行われ、最優秀賞、優秀賞、入選の計 12 点を決定しました。

【一般投票賞】

新型コロナウイルス感染症の拡大による審査会の延期に伴い、本年は中止いたしました。

審査員： 岸本 葉子(エッセイスト)

堀 均(公益財団法人 日本対がん協会 がんサバイバークラブ)

西村 詠子(NPO 法人 がんとむきあう会 理事長)

森 香保里(四国こどもとおとなの医療センター アートサイコセラピスト)

亀山 哲郎 (フォトグラファー) ※順不同／敬称略

賞： 最優秀賞(各部門 1 名)、優秀賞(各部門 1 名)、入選(若干名)

### 日本イーライリリーについて

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの日本法人です。人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう、革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じ、がん、糖尿病、筋骨格系疾患、中枢神経系疾患、自己免疫疾患、成長障害、疼痛、などの領域で日本の医療に貢献しています。詳細はウェブサイトをご覧ください。<https://www.lilly.co.jp>

【最優秀賞】 絵画部門

長谷 久枝（ながたに ひさえ）さん <東京都葛飾区> 作品タイトル『雨の初診日』



■エッセイ(抜粋)

「乳がんなので、総合病院に行くように」。手術も化学療法も拒否し、緩和ケアを受けたいと申し出ました。家族に話しをすると大反対。どうするべきか揺れる心で紹介された総合病院を改めて受診する日、地下鉄を降り、地上に出ると雨が降っていました。病院に行く道々には、梅雨を彩る花々、あじさいやくちなしが咲き誇っていました。結局、手術を受け入れることに。それから3年程が過ぎ、肝転移が見つかり、再び抗がん剤治療を受けることになりました。家族は何くれとなく気遣い、あれやこれやと世話を焼いてくれます。何と幸福なことだろう。

【最優秀賞】 写真部門

久保田 将（くぼた まさる）さん <愛知県名古屋市> 作品タイトル『軌跡の1枚、奇跡の1枚』



■エッセイ(抜粋)

2年ぶりのブランコに娘は大はしゃぎだ。当時3歳だった娘に癌が見つかった。遠隔転移あり。ステージ4。娘を失う恐怖とその未来に絶望した。3人で抱き合いながら涙を流した日、娘が「大丈夫だよ、ちーちゃんいなくなるはないよ」と言った。癌と闘うこと、娘の命を守ることを強く決意した。「公園で遊びたい」と願う娘の強い意志と、「後悔だけはしたくない」と病气や薬、治療のことを熱心に学ぶ妻、多くの方々のサポートで、約1年10ヶ月の闘病の末、本退院を迎えた。この写真は、ただの当たり前の日常かもしれない。しかし、私たちには毎日訪れる奇跡の1枚。同じ病气と闘う子ども達の希望の星になることを願う。

【最優秀賞】 絵手紙部門

亀石 滝子（かめいし たきこ）さん <大分県国東市> 作品タイトル『生かされている命に感謝』



■エッセイ(抜粋)

耳の脇の違和感。私と癌との付き合いが始まった。病院の方々や家族と一緒に沢山のことを乗り越えてきた。今となっては、命を見つめ直す大切な時間だった。一月初旬というのに落の臺が土の間から小さな芽を出している。この時期は今迄一度だって、こんなことはなかった。一月のはじめに大切な妹を失った。あまりにもあつけなく、この世から去ってしまった。私の病気がわかった時も多く励ましてくれた。今、私は薬が良く効いて普通の生活を送ることが出来ている。いつもの場所にいつもより早い落の臺を見つけた時、命のはかなさと恵みを感じた。私に命の大切さを教えてくれる、妹からの少し早い贈り物だったのかもしれない。



**【優秀賞】 絵画部門**

松尾 倫子 (まつお みちこ) さん <福岡県福岡市> 作品タイトル『水の中の女神』

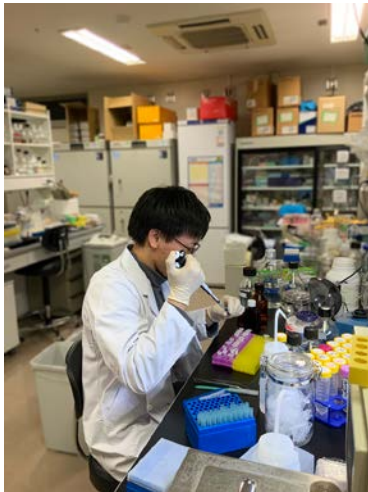


■エッセイ(抜粋)

「水の中はまるで別の惑星だなあ」初めてスキューバで潜ったときに感じた。二年前に進行がんで回復出来ない事を告知されたとき、この風景を思い出していた。音が消え、周りとの会話ができない。人がたくさんいても孤独だ。その中で忘れられないのは、彼女。驚くほど明るくて、周りを豊かな光で照らすような人がいた。自身も体がつらいはずなのに。正に暗い海に一筋輝く暖かい光のよう。「女神」と呼んでいた。今、二年たって彼女はもういないけれど、彼女の残した光は私の瞳に残っている。せめてあの暖かい、優しい、いい匂いがするような光を何とか周りに伝えていきたい。まだできることはあると信じたい。

**【優秀賞】 写真部門**

渡邊 励人 (わたなべ れいと) さん <大阪府茨木市> 作品タイトル『私の闘病』

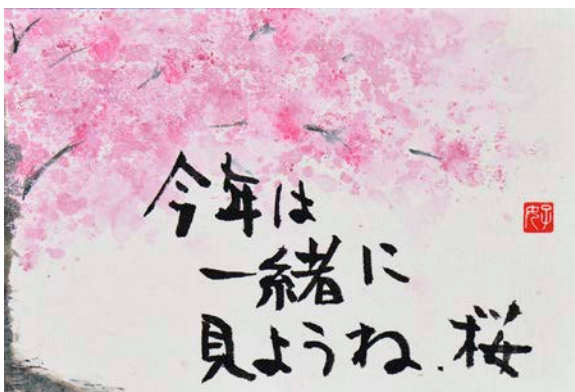


■エッセイ(抜粋)

大学院の博士課程で、『細胞のがん化はどのように起こるのか』を解明することへ繋がる研究をしている。ある日、首にしこりがあることに気が付いた。手術による全摘出と検査を行った。血液のがん、悪性リンパ腫ですと告げられた。がんを告知された日は、一人きりの部屋で、恐怖と不安で押しつぶされそうになって泣き通した。泣き果ててしまうと、なんでこんなに泣かされているのだろうか、逆に腹が立ってきた。研究の方でがんと闘ってやろうと決意した。この写真は、翌日から入院を控えた私だ。必ず研究へ復帰し、写真のような日々を取り戻して、がんの解明に努力したい。これが私の闘病だ。絶対に、負けないぞ！

**【優秀賞】 絵手紙部門**

三好 亜希子 (みよし あきこ) さん <埼玉県八潮市> 作品タイトル『今年是一緒に見ようね、桜』



■エッセイ(抜粋)

余命1年と伝えられた父と共に初めて一緒に病院に行った日、病院の中庭に桜の木があることを知った。父に思わず言った「今年是一緒に見ようね、桜」父は「うん」と小さく返事してくれた。3ヶ月前、父が急に泣き出した。『癌』は想像していた以上に両親の心を蝕んでいった。不安という波はとてつもなく大きく、深いところまで追いつめる。それでも少しずつ、治療に前向きになった頃、余命宣告を受けた。癌と共に生きていくしかない。もう癌は父だけのものではない。私は、父の癌と共に生きていく。今できることは、全部したい。泣きたくなることもあるけれど、今はまだ泣かない。春はもうすぐだ。きっと桜が綺麗に咲くだろう。